



図書館籠りのすすめ



鶴田大輔（准教授 企業金融論）

大学3年生の春休みに、私は大学院に進学しようと考えた。といっても自分が大学院に進学して、学問を続けるだけの素質があるのかよくわからなかった。素質を自分でははかれないし、あれこれ悩んでもしょうがないので、とりあえず図書館に朝から晩まで籠ってみた。図書館で一日中、勉強をしたり本を読んだりして過ごす生活が耐えられないようだったら、自分には大学院まで進学して学問をつづける素質がないと考えた。図書館には多くの人が色々な勉強をしていた。電卓をひたすら叩いている人、必死に鉛筆を動かし問題集を解いている人、専門書を黙々と読んでいる人など、さまざまである。いつもシーンとしていて、張り詰めたような空気があり、とても集中して勉強ができた。不思議なもので、最初は苦痛だった図書館籠りは一ヶ月ぐらいたつと苦痛ではなくなり、図書館が閉館する時に流れる「G線上のアリア」を聴かないと一日が終わった気がしなくなった。図書館では息抜きといっても、本か新聞を読むかことしかできないので、いろいろな知識が身についた。

大学院に入学してからも、図書館籠りは続いた。大学院ではコースワーク（ミクロ経済学、マクロ経済学、計量経済学）で「優」の成績をとらないと、博士課程には進学できない。私は博士課程に進学したいと思っていたので、是が非でも「優」の成績をとらなければならなかった。しかし、大学院の授業は難解だし、同級生はもともと出来が良いくせに、よく勉強をする。この中で「優」の成績をとるには、とにかく図書館に籠って勉強するしかなかった。毎日、辞書よりも重い教科書を図書館に持参して、悪戦苦闘しながら勉強した。このころはすごく焦っていて、図書館閉館の音

楽が流れてきても、まだ図書館に居座り続けたい気分だった。

図書館に籠ることで、その時々之苦勞を乗り越えてきたこともあり、今でも研究で行き詰った時には図書館に行くようにしている。学生の皆さんもゼミの発表準備、試験勉強、レポートなどで行き詰ることがよくあると思う。何かに行き詰った時には、とりあえず図書館に籠ってみてはどうだろうか。朝から晩まで図書館に籠っていれば何らかの成果が得られるはずだし、逆に一日中、図書館に籠っているのに何も成果が得られないのであれば、思い切ってあきらめがつく、もしくは方向転換をすることができるかもしれない。

大学を卒業してから日本大学経済学部の教員として着任するまで、いろいろな大学の図書館に通い、図書館籠りをしてきた。その中でも日本大学経済学部の図書館は、図書館籠りに適した図書館だと思う。建物や設備は御世辞にも新しいものとは言えないが、図書館独特の緊張感や張り詰めた空気は他の図書館に引けを取らない。せっかく良い図書館があるのだから、学生の皆さんは大いに図書館を活用して欲しい。

